



技術の高い人間と 天才との違い



ヤマダヒフミ

芸術というものが本当の意味で、後世に残るようなものになる為には、その人間の技術と、その人間の無意識とが、直につながらなくてはならない。それは例えば、ジミーページのギターが、ジミーページの無意識と、あるいはその肉体と完全に融合するという事だ。ジミーのギターは、ジミーの肉声である。そして、普通のボーカリストの歌声は、大体的場合、その人の無意識や混沌とはつながってはいない。うまかろうと、下手だろうと、それは同じ事だ。

例えば、水樹奈々やTMレボリューションみたいな、非常に歌のうまい人達がいる。彼らは普通では考えられないほどのトレーニングをして、それぞれの歌声を磨きあげた人達だと思し、その歌声を聞いていると、非常に心地よい。しかし、その歌声に感動する部分は言ってみれば、首から上の部分に限られる。頭で聴き、耳で聴き、気持ちいいと感じる。しかし腹にこたえる――こんな言い方は変かもしれないが――ものではない。僕は、神聖かまってちゃんの「ロックンロールは鳴り止まないっ」をはじめで聞いた時、腹の辺りを思い切りぶん殴られたような感覚を味わった。・・・頭の方では、「こいつは下手くそだな」と否定しているにもかかわらず。

こういう違いが出てくるのは何故か。ここにはおそらく、人間にまつわる、非常に根深いものが隠されているように思う。つまり、芸術に、自分の人生を左右する一大事を求めるか否か、という問題である。これを求める人は知らず知らず求めているものだが、しかし、これを求めない人は重たいものが出てくると、すぐにそれを拒否する。これは人間性の違いであり、また、単なる好き嫌いの問題ではなく、いわば、その人間がどういう人生を歩むかという指標になるので、非常に大切な問題である。

少し、問題を変える。

現代では、沢山の人が芸術作品を作り出し、輩出している。ネットを見れば、それがわかるし、僕もその中の無数の点の一つにすぎない。では、その中で本当の意味で優れているものとそうでないものは、どうやって見分ければよいだろうか。

今、僕が感じるのは、とにかく全員が「うまい」という事である。下手な奴が一人もいないといっていいくらい、みんな技術がある。うまい。しかし、どこことなく何か足りないような気がする。それは何故か。どうして、そう感じるのか。

これは芸術に関する、全般的な問題だろう。どうしてそうなったかといえば、あらゆるものが類型化したという事に問題がある。あらゆる作品には、範疇が決まっていて、人はそれを学べば、それなりのものができる事になっている。そして、そのノウハウは無限に溢れている。それで勤勉な人達は、手早く、利口でさっぱりとした、それなりの作品を作ってしまうのだ。

そうした上手い作品の特徴として考えられるのは、いつもその作品が範疇的である事、つまりテンプレート的である事、そして無意識と、それに付随する即興性が欠けている事にある。例えば、僕がライトノベルを書いて一発当てようとする。すると、僕はその募集要項を見て、過去の受賞作、その受賞傾向を見て、そして次に「ラノベの書き方」という本を買ってきて、そして自分のノベルを書き始める。そしてまた、そういう人間がこの世界には、何千、何万といるのである。だから、それには判を押したような同一性があるとしても、少しも驚くべき事ではない。

しかし、そうはいつでも、テンプレートというのは重要である。形式なき作品は、我々には理

解できないし、テンプレート的なものは、いつもある一定の割合で受けるものだ。アニメなどでも、繰り返し繰り返し、同じような萌え要素のあるアニメをやっている。それらはテンプレの形を少しずつ変えながら、同じ事をやっている。これは人間の保守性に訴える事であり、見ていて安心できるという要素も多くあるように思える。

問題は――とにか、大きな問題は、ごく優れた少数の天才である。どうして、これほどまでに、技術の優れた我々、ディレタント達は、皆が皆、天才になれないのか。どうして、ここまで様々な経験と、知識を脳にインストールして出発した我々は天才ではなく、凡人なのか、という問題である。この問題はとにかく厄介である。

問題が厄介だというのは、とにかく天才というのが厄介な連中だという事である。これほどまでに、厄介な連中はいない。まず、彼らは全ての論理を退ける。全てのテンプレートを嫌い、独自性を見つけようとする。それも、人々が独自性と吹聴するような、「人と違う服を来て独自性をアピール」のようなものとは違う、魂の独自性とでもいうべきである。そして、その彷徨の末に、彼らは自身の魂の独自性、その肉体の人との違いを発見する。そして、それは音楽では調べの変遷として、文学では特異な文体となって現れる事になる。一流の詩人の書く詩は、彼の肉体の一部である。あるいは、肉体そのものである。しかしそうではない詩人の書くものは、彼の肉体を離れている。この人間は詩を書こうと欲する。そして、自分が望む、社会主義的正義や右翼的言説やヒューマニズム的なイデーを挟んだ詩を書こうとする。だが、それは、彼の肉体ではない。芸術家というのはまず何よりも、肉体でなければならない。あるいは魂ではなければならない。そして、その魂を発現させる役割として機能するなら、右でも左でも、好きなイデーを持ってくればいだろう。だが、その時、絶対に忘れてはならない事は、その芸術作品の中においては、イデーは魂の下に従属している事にある。もし、イデーや、何らかの、自分の外のものを自分の魂の為に活用できないなら、そしてその奴隷に屈しているなら、それは芸術作品として一流とはいえないだろう。それらは互いに矛盾するものである。一方が上に来れば、一方は下に来る。だから、芸術作品は徹頭徹尾、「自分的」であらねばならない。どんなに他人の事を歌っていようと、それは他人を思う自分の魂を歌ったものでなければならない。

今は、何らかの主義や思想というものを扱ったが、技術というもののまた同じ事である。例えば、僕が曲を作ろうとしていて、あらドラムパターンを使って、曲を作ろうとする。この時、僕が二流であるなら、僕はこのドラムパターンに引きずられて曲を作ってしまう。だが僕が本物の芸術家ならば、僕はこのドラムパターンを、自分の心情の発現の為の道具とする事ができる。僕はこのドラムパターンという道具を好きなようにひきずりまわし、こねくりまわす事ができる。そして、僕の魂の配下においてしまう。そうしないと、芸術作品は一流のものとはならない。

今、氾濫している多くの作品――そして、そのアーティストが「天才」と呼べないのは、大体、このような理由があるように思われる。(もちろん皆が天才である必要はないが。)問題は技術にあるのではない。芸術において、重要なのは「魂の技術」とでもいうべき、技術である。その人間がどんなに未熟だとしても、世界に向かって叫びかけたい自分を持っているなら、その人間は才能がある、と言えるかもしれない。その人間がやがて、何らかの具体的技術を彼の魂の征服下におけば、彼は一流のアーティストになれるからである。しかし、最初から、発現したい自

分を持っていない場合では、そうではない。彼がいかに、技術的に卓越した所で、彼は最後まで、芸術家になる事はできないだろう。・・・しかし、その彼は最初から、自分自身を外側に出したいと、そう魂の奥底から望んでいるわけではなかったの、キリストの、「求めよ、さらば与えられん」の論理もここにあてはまると言って良いだろう。彼は、元から天才になる事を望んではいなかった。・・・もちろん、天才の外面的な所だけ見て、他人からちやほやされ、金と地位を得たいと考えている人間は論外である。そんな人間に関しては知った事ではない。

しかし、天才に関しては、その天邪鬼的な論理について、どうしても言わなければならないだろう。天才が天才たるゆえんは、過去の模倣を嫌うという所にあると思う。例えば、今、クラシックの大御所が何故現れないか、と言え、それは時代が違うからである———といえ、単純だが、結局、現代の人間を構成している人間の自意識と、十九世紀の人間を構成している自意識の形は全然違う。例えば、よくある質問だが、「マラドーナは現代サッカーでも通用しますか?」とか、「ドストエフスキーは現代でも有名になれますか?」という質問がある。こういう質問は質問自体が間違っていて、はっきりと言える事は、マラドーナはあの時代だからあのようなプレイスタイルの持ち主になったという事であり、ドストエフスキーはあの時代のあの国に生まれたから、あのようになったという事だ。そもそも、ドストエフスキーの作品を構成している多様な要素を少しでも噛み砕いて考えようとすれば、上記の問いそのものが不可能だという事にすぐ気付くだろう。彼は、彼こそは何よりも、その当時の現代的で、そしてロシア的な人間だった。少なくとも、その問題を徹底的に考えぬき、その問題と頭から衝突した唯一の人間だった。その彼が今生きていたらどうか———。彼は全く、「ドストエフスキー的」ではなかったろう。そして、彼が今、どんな作品を書くかという事を予想するのは、不可能と断言するに十分な事なのだ。

技術———この問題について立ち戻れば、全ての技術というのには、全て、過去のものがあつた。こう言うとうわが言いが、たとえば、モーツァルトがいなければ、ベートヴェンはあつただろうか。あるいは、バッハがいなければ、モーツァルトはあつただろうか。答えは分からないが、もし、モーツァルトが凡才であつたらなら、バッハの曲を聴き、感動したとしても、彼はモーツァルトになろうとはしなかったろう。今、それは沢山の人がしているように、彼はモーツァルトであるにもかかわらず、バッハ的であろうとするだろう。何々流、何々風、というのは、すぐにその恩恵を得られる。オリジナル曲をつくるより、既存の流行りの曲をアレンジしたり、それに自分の声をのせる方が、他人は遥かに評価してくれるだろう。・・・だが、その労苦の量はオリジナルの方が多い。しかし、天才への一歩は、この道を逆に引き返さなければならない。そして、全てのテンプレートを廃止つつ、自分の肉体と魂のみをただ一つの武器として、あらゆる現実条件を自分の道具に化さなければならない。真に、千里の道は一歩から、とでもいうべきものだ。天才の歩みというのは、とにかく途方もなく長い。彼らが心理的に歩んだ距離の長さは我々の尺度では測れないのかもしれない。

こうして考えると、天才というのは真に厄介な連中だと思える。・・・例えば、カール・マルクスのような天才について考えれば、彼の資本論の精緻な理論が世界全体を覆い、彼が世界に対して「然り」と肯定の言葉を放った時、彼にノーをつきつけていたのは、実は彼そのものだった

。彼は確かに、世界を覆う、完璧な理論を造り上げたのかもしれない。世界はこの理論のどこからみても見ることができない。だから、その理論そのものを創造している人間だけは、その理論の外側に立っていなければならない。彼は、論理外の人間である。人はその中にいて同時に、その中を外から見ることができない。街全体を見下ろすには、街を見下ろす一番高い塔に昇らなければならないが、この塔はこの街からはみでている。そしてこの塔に昇って、全てを観察する人間は、この観察の外にいる。マルクスの理論の一番の反逆者は誰よりも彼自身であった。これは、天才には避ける事のできない悲劇だ。

以上で、大体、天才と技術との関連については触れる事ができたように思う。本当はもっと違う事を言おうとしていたのだが、それはできなかった。それはまた別の機会に言おうと思う。しかし、僕が魂などという言葉で乱発したのは、結局そういう言葉でしか言い表せないものが、人間の中にあるからだ。今は、芸術について、様々な精緻な理論的な言葉が出ているが、結局、本質は変わらない。あるいは盛田昭夫風に言うなら「本質とは変えてはならないもの」であり、本質を忘れた所に、様々な派生的、偶発的言辞が現れるのはいつの時代でも同じ事だ。結局、人はいつも何かを聴き、見ているようで、何も感じてはいないのかもしれない。――ピカソの凄さについて語る時、美術史の一節やググった情報を並べ立てる人間がいるが、それだけでは手落ちだ。自分の感情や感覚について語らなければ、何かを語った事にはならない。しかし、今という時代はこれほどまでも、個人の感覚や感情を軽視し、(笑)という時代なので、自分の事を言うのはどこか気恥ずかしいのだろうとも思う。しかし、芸術などというものに携わる人間にはどこか腹をくくった、人から馬鹿にされる事を当然だと思う、くそ度胸のようなものも必要なのだろう。

技術の高い人間と天才との違い

<http://p.booklog.jp/book/80221>

著者：ヤマダヒフミ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadahifumi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80221>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80221>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ